

優秀賞

目指せ、習字の達人

京都市立高倉小学校 4年 山本 想真

「絶対ぼくに習わせないで。」

これは、一年生になったばかりのぼくが習字教室の体験につれて行かれる時に、母に言った言葉だ。習字教室は、姉のおむかえのために母と何度も行ったことがあった。みんなが静かに正座しているだけの、地味でつまらない場所。そんなところに自分もじつと座っているなんて、想像するだけで苦しくなった。ところが、体験の後で母に飛びついて言った言葉は、「絶対習いたい！」だった。筆で書く感触が、たまらなく気持ち良かったからだ。この時に、「習字の達人になる」という目標ができて、四年生の今も続けている。

ぼくは「はね」が苦手だ。何度書いてもバサツとした太くてギザギザしたはねになってしまうことがある。上手く書けると、「やった！もつと書きたい！」という気持ちになるが、思うように書けないと、ズーンとした悲しい気持ちにしみこむ。先生のアドバイスは、こうだ。

「手首じゃなくて、うでではねるよ。」
さらに、

「ひじの下に筆がぶら下がっていて、そこで書いている感じね。」
と。難しい…。ぼくにはどれも、すぐにはイメージもできないものばかりだった。考えてやってみても、なかなか上手くいかなくて、また、ズーんだ。

でも、練習していると、何となく感覚がつかめた気がするしゆん間がたまにはある。まだ先のとがったきりつと美しいはねは、いつもできるわけではないけれど、あきらめたくない。考えてみると、習字は書道ともいう。道はその先に目的地があると信じて歩くものだ。ぼくの目指す目的地は習字の達人。達人への道は遠いに決まっている。ズーんに負けるな、絶対にあきらめないぞ！

火曜日が来るとまた自分にそう言い聞かせて、リュックを背負ったぼくは、習字教室に向かって歩き出す。